2013年7月5日　建設工業新聞　（抜粋）

大きな期待に応え、安全安心を

県コンクリート診断士会が総会

新潟県コンクリート診断士会（地濃茂雄会長）は4日、新潟市中央区のほんぽーと新潟市立中央図書館多目的ホールで今年度総会を開催した。

総会には委任状を含めて約70人の会員が出席。

今年度事業計画などを決めた総会

初めに地濃会長が、「県内の高速道路で＜コンクリートの診断はコンクリート診断士に＞と書いてある車を見てうれしかった。社会からの期待は大きいものがあり、これに応え、安全安心を守っていく必要がある。笹子トンネル事故以降、コンクリート構造物の老朽化の問題がとりざたされている。初めての事態だ。診断士は医者と同じ。医学の発展で人間の寿命も延びてきた。6年目に入り知名度も上がっている。われわれもレベルアップを図り、老朽化問題にもしっかり対応していこう」とあいさつ。事務局からは6月末の会員が正会員97人、賛助会員（個人）4人、賛助会員（法人など）11団体であることが報告された。

今年度事業計画では11～12月に診断・新補修技術に関する技術セミナー、14年2月に技術発表会を開催することなどを決めた。また、社会的な地位の向上に向けて関係自治体への講師派遣、国・県・市町村へのPR強化なども盛り込んだ。

総会後、「インフラの老朽化を考える」をテーマにしたシンポジウムも開かれ、新潟県道路管理課計画・安全係の土田研一係長が新潟県道路施設維持管理計画の概要、近藤治会員（開発技建）が補修設計における課題、中村博之会員（BASFジャパン）が断面修復における課題、小林徹会員（レックス）が新潟県内の補修事例について話題を提供した。このうち土田氏は県の取り組みについて、補修選定個所の「見える化」、予防保全型維持管理への転換に向けた長寿命化計画、橋梁長寿命化修繕計画、橋梁から施設全体への取り組みイメージ、制約される予算の中での道路施設全体の計画策定（道路統合マネジメント）などについて説明した。シンポには長野県コンクリート診断士会のメンバーも加わった。

その後、場所を移して懇親会も行われた。